

石母田 正氏を偲んで

永積安明

一九八七年四月五日、石母田 正氏の逝去後一周を記念し、歴史家をはじめとする各界のひとびとが、東京竹橋の竹橋会館に集り、氏の業績や人物を追慕し、「石母田 正氏を偲んで」という催しを行いました。左の文はその集會中、司會者からの指名により石母田氏と文学とのかかわりについてお話しした時の録音に、修正を加えながら活字化したもので、当日の参加者の中から十数名が氏の思い出を語った時の録音によるものです。この録音は当日會合の世話を引き受けた岩波書店編集部による非公開のものです。このたび「文芸論叢」から随想を求められた機会に文章化し、石母田氏のすぐれた業績の一端を明らかにしておきたいと思って、これを公けにすることにしましたものです。

ご指名とご要請に従って、石母田さんの業

績から特に文学的な側面について、ひとことだけ申し上げます。石母田さんと私との間には意外にいろいろなことがあって、みなさんのご存じないこともありました。じつは十五年戦争中から戦後にかけて、私は法政大学の非常勤講師を勤めていましたので、石母田さんと同じ職場にいた時期もあるわけですが、それ以外に妙なところではいっしょになったことがありません。それは、日本出版会後に日本出版文化協会と呼ばれた出版用紙の統制機関で、そこにはいろいろな人物がいました。たとえば小説家の武田泰淳氏も一時、書記として同じ部屋で仕事をしていましたし、変わった人物では、『眠狂四郎無頼控』の作者シバレンこと柴田鍊三郎氏もいました。また、もともと経済学者で大学教授でありながら、時代ものの

大衆作家として知られている南条範夫氏もいました。そういえば、あとになるとフランス文学の河盛好藏氏も机を並べて仕事をしていたことがあるという変わった職場でした。いろいろな人物が戦中から戦後にかけての、いわば隠れ家として利用していたともいった場所なのです。ところが、この職場に石母田さんもしばらく席をおいていたはずですが、長い間欠勤を続けていて、私はその職場で一度も会ったことがありません。しかし噂によると、石母田さんの長期欠勤は実は博士論文を執筆中で忙しいからということでしたが、私は、あのりっぱな古代・中世史論をまとめた石母田さんが、博士論文などという、つまらぬものを書くはずはない(笑い声)と思っていましたが、それは職場のおえら方が博士論文執筆中といえ、石母田さんの欠勤を大目に見てくれるだろうという配慮からで、今から考えると実は戦後公刊された名著『中世的世界の形成』を完成するために、そんな職場に出るひまがなかったためだと思われまます。だから職場からの給料だけは貰っていたはずですが(笑い声)。最近、岩波文庫にこの本が入ったと聞いて、岩波文庫も健在だなと思ひ(笑い声)、今日出がけにポケットに入れて電車の

中で頁をめくりながら来たところだ。

ところで、今日は司会者から一人三分以内の発言という要請なので、雑談はこれくらいにして、当面の石母田さんと文学という問題で、その一端を申し上げることに致します。石母田さんは、さきほど、ご存じの「教科書訴訟」に関係する会合があつて出席できないので、と送つてこられた家永三郎氏のメッセージの中に、石母田さんの『宇津保物語の研究』は、私が文学についての眼を開かれたすぐれた論文であると述べられているとおりで、私もこの論文は歴史論であるとともに古典文学論としても第一級の労作であると考えて、早くから愛読していました。そういう石母田さんですから、歴史家としても珍しく文学的な論を展開されていました。だから私も、氏の歴史論だけでなく文学的な論説にも注目してきましたので、氏の『平家物語』論は何回か書評しましたし、氏もまた私の書評に反論したり、私の論文を批判されたりし、お互いに批評しあつた仲です。

ところで、氏の論旨がいかに文学的であつたかは、たとえば岩波書店から昭和33年4月に刊行された「日本文学史講座」の第一回配本に私の執筆した「方丈記と徒然草」という

論文が載っていますが、石母田さんはこの論文の書評を引き受け、例によつて、「私は文学はわからないが」とまず記した上で、「私には『徒然草』は手におえないので、短い『方丈記』の方を取り上げたい」と述べて展開された書評の中に、『方丈記』には「侍り」という語が何度も見えるが、それらの「侍り」は、あの有名な序章にも、また隠遁した後の生活記録や最後の結語にいたる部分にも、全く使用されていない。ただ火災をはじめとする有名な五つの災厄事件を回想した部分にだけ集中的に現われているが、その理由についても明らかにしてほしかったという穏やかな、しかし手痛い批判でした。今でこそ『方丈記』中の「侍り」について説明した論文はありますが、当時は専門の国文学者も十分に考えていなかった『方丈記』中の「侍り」の語を、まさに表現の問題として提起しているのは、「私は文学はわからない」などと述べながら、実はすぐれて文学的な論旨を展開して専門家に迫っているわけです。

また氏は『平家物語』の物語的表現にも注目しており、現に広く読まれている岩波新書の『平家物語』など、私は今でも学生たちの古典文学に関する参考文献として、まっさき

に推薦しているもので、全くのすぐれた作品論つまり文学論です。そういえば最近、木下順二氏の『子午線の祀り』という、ご存じの『平家物語』を材料にした新しい劇の主役として登場する平知盛の人物像についても、あの、「見るべきほどの事は見つ、今は自害せん」という有名なせりふが見えますが、これも木下氏自身が石母田さんの『平家』によるものだと述べているくらいで、「私は文学はわからないが」と述べているにかかわらず、氏の論旨はすぐれて文学的であつて、むしろ文学者に先んじて新しい文学的な問題を提起しているくらいです。

歴史家としての石母田さんの展開した論説が、氏の文学的な視点に支えられて豊かな結果を見せていたことについては、そのほかにも申し上げることがありますが、与えられた時間が来ましたので、以上でもっていちおう、私の石母田さんを偲ぶ心の一端を述べさせていただいた次第です。